

# たより

## 『美紗の会』 ニュース

第43号

平成十五年五月一日

発行者  
「美紗の会」  
03-3441-2726  
編集責任者  
大久保 朋子

### 美紗の会・花も雪もを終えて

西松 布咏

振り返りますと今年で美紗の会も二十五回・西松布咏を継承して十五年を迎えました。芸道を志してただひたすら「花も雪も唄と共に」と、常に唄は私の心にありました。そして今まで唄い続けてこられたのは周囲の暖かい励まし、共にお稽古を続けて下さっている美紗の会の皆様のおかげでございます。

私の心うとした思いを地元のお金芳園の満沢さんが快く受けて下さり忘れられぬ記念の会となりました。日頃は「中味が肝心」形にこだわらないのが美紗の会をモットーにしておりましてが今回は、よつとよそゆきのしつこいを、と男女ともに着物で舞台に臨みました。お陰で男性陣は日頃開けない簪笄から父親や祖父の着物を引っ張り出すやら清水の舞台から飛び降り新調するやら、月賦支払いの談判をするやらの大騒ぎ！

私も今回は大勢のお客様にいらしていただくのだからと並々ならぬ熱い思いで繰り返して当日は早咲きの桜もちらほら咲き我々の緊張をほぐしてくれぬかのような上天気。五階の会場は金屏風と絨毛氈で華やいだ雰囲気。加藤さんの明るく軽妙な司会とお弟子さん方、二部の黒子役のお弟子さんが見かねて進行役を買って出て下さりなんとかスムーズに番組が進行してゆきました。

人も柄も内容だけでなく力量と情熱にかかっての思ですが我が美紗の会の様々な個性が皆様には伝わりましたでしょうか？

ご家族、お友達、ご近所の方々が応援して下さいましたことおさらい会になりましたこと

を心から感謝いたします。そして休憩をはさんで第二部の西松布咏継承十五周年記念演奏会へと続きました。やはり地味な西松文一師から戴いた「布咏」は日々唄い続けてまいりました。「雪」を唄わねば・・・と。しかし唄うたびに突き当たる自分の未熟さ。弱さを感じながらそこはかとな言葉の重さを我が人生と重ね合わせしんと降り雪の中をたど一筋歩みつつける春間では目下幅広分野で活躍の法政大学教授の田中俊子先生のお話が会場の雰囲気と和らげ異次元の世界へとお客様をお連れ下さいました。

「鐘が響く」は恋の行方の陰から陽へとあややかに格調のある花柳千寿文師の舞踏の地を文一師のご長女孝子さんの御琴と共に務めさせて下さいました。

花吹雪の下で様々に変化する女心の微妙さを長年来研鑽を積まれた千寿文師のゆきと共演出来て光栄でございます。予想をはるかに越えるお客様に「お越しいただき三部のパーティでも伝統文化放送三枝社長やNHKの軍司局長の祝福をいただき賑やかに楽しんで春の宵となりました。一門のかつぱれやお嬢やそのいを誘い江戸の面影を残す八芳園での記念の絵巻物のようでお楽しみくださいました。私の思いを心を一つにして支えて頑張ってくださいました美紗の会の皆様、ご多忙の中お越し下さり励まして下さったお客様、本当に有難う存じます。これからも精進してまいりますので今後ともよろしく御願い申し上げます。

### 美紗の会を終えて

#### 布咏先生との出会いとこれまでの自分を振り返って

池水 美都

まさか八芳園の赤毛氈の上で初舞台を踏むことになろうとは。今振り返ると、バチを持つ手が緊張で震えてしまったのを覚えています。慣れない着物姿であることに加え、人前で火が出るということに、顔から火が出るほど恥ずかしくなりましたが、発表の場に向けて何曲かを集中的に稽古に励むことができました。普段は仕事の忙しさがちがって練習を怠けても、きつと上達する努力を怠ることは出来ませんでした。

昨年の秋、銀座養生堂ワイドの田中俊子先生の講演で出会った、布咏先生の三味線の音色と複雑な声の響きに魅せられ、即座に美紗の会の仲間入りを決めました。入った感じが、皆さんが本当に先生を慕い、先生を中心に本當に思いをひとつにされていると、舞台に立つと恥ずかしい姿だけは見せたくはないな、という思いだけで私は練習していました。当日の美紗の会の面々の真摯な姿勢を拝見して、会へのよりとして恥ずかしくありません。と、いふ意識も生まれ、気持ちもキリリと引き締まりました。みなさんお一人お一人の個性溢れる演奏、そしてこだわりの着物姿も素敵でした。私もみなさんを見習って、これから三味線と着物がしっくり馴染む人になっていけたら、と思ひます。

布咏先生が「サイタルで披露された『雪』は、正直、聴きながら「念仏」を聞いているような感覚に陥りました。心に自然にじわじわと染み込んでいく三味線と唄は、静かだけれども、とても深い世界をいつも感じます。先生のさまざまな思いが唄に乗せら

### 美紗の会会長と挨拶

本郷 公基

一年程前から師匠と岡崎会長から次期会長を引き受けてくれたのかという打診がありました。私は他に適任者が居るというので固辞していましたが、昨年未だに師匠から再度の要請があり、考えた末お引き受けることになりました。会員の皆様によくご承知の通りわたしは生来の音痴でおまじに悪声の持ち主です。その上小唄や端唄を唱へるに身に付いている「遊び心」や「江戸の粋」から程遠い器用な野暮天で、おおよそこの種の後援会長に不向きな性格です。おまじに会員の皆さんと違っておまじは、お酒を飲む機会が増えて楽しいからと、たまに言え、経緯があります。そんな私がなぜ美紗の会の会長を引き受けたのかをお話し入ります。

十数年、小唄や端唄を聞いた自分でも、唄っている内に三味線音楽のよさがすくすく理解できるとなりました。また、邦楽の歌詞と旋律が自分には心地よいものかと思えるようになってきたことと、次に子供の頃「大人になつてお金持ちになつたら一流の芸術家や芸人のスポンサーになりたい」と言う願望がありました。残念ながら貧乏サラリーマンのままで定年を迎えましたが、気心と知恵を使つて師匠のサポート兼スポンサーに成ろうと思いはじめました。

そしてなんと言つても我が師匠の歌声ほど素晴らしいものはありません。何処へいっても師匠より上手なシルクソウルの唄い手は見当たらない。師匠の情感を込めた演奏は聴く人の心を打つものである。そしてその上にお人柄が実に素晴らしいという

是非とも上方地唄舞の「ゆき」をからませたいと思つたからです。物心ついた時から「ゆき」の魅力にとりつかれ本當に「ゆき」が好きなのです。

西松師匠の「ゆき」は、やはり「松」でした。未練を残しながらもある種の「あきらめ」が粋に通じていたように感じました。粉雪のように「はらへば清き」の雪でした。上方の雪は、牡丹雪のように感じました。田中先生のコメントにもあったように、陶然となつてしまいました。

より一層上方伝法藝をしっかりと一層も上を目指して、思いを深めました。一転してお仲間、皆様の暖かい春の雪が心躍るものに見えました。花吹雪が舞っていました。

荒木 雪破

師匠！大きな舞台を有難うございました。この節目にあれだけ沢山の人が来てくれただけで、本當におめでと御座います。何より美紗の会の「和」の大きさと心地よさに酔い倒れました。まさに打ち上げ戴いたおでんのように、いろいろな人の味が一つになつて、

ことです。

会長になつて「美紗の会」会則を改めて見直し、美紗の会は会長を助けると共に活動の健全に進めると共に務めることとあります。また第十一号（会員の務め）には「会員は会の主催する、または会主の出演する公演には積極的に参加し、また会主の開催する催しの入場券、録音物、出版物の販売、宣伝等に協力する」とあります。これらを勤めることが、新会長として何が出来るかを考えた結果、

一、自分の過去の経験を生かして、客船の船上で「おまじ」を唄う機会を創出してみたい。

二、己を知り更に腕を磨くために、一度他流試合を試みたい。

三、師匠を通じて邦楽のよさを多くの人に知ってもらうために、様々な機会を捉えて師匠の発表会を企画・製作してみたい。

以上会員の皆さんの温かいご支援とご協力を心からお願ひ申し上げます。

お客さんで打ち上げまで来てくれた真剣さんと舞台上の出演者の真剣さんと打ち上げの親近感の差に驚いていました。今回はひとときわ思い出深い会となりました。

今回やつと西と東のそれぞれの「ゆき」を生で聴き比べることが出来たのですが、なるほど、江戸の「ゆき」は、ほんとにさらりとしていて、かえって情や間が鮮烈に見えていました。もともと江戸にあって布咏師匠の「ゆき」は、特に鮮烈さが際立っているのかもしれないが、上方の「ゆき」はどちらかというとやんわりして、哀しみに徹するような剛くような感じがありません。それはそれで、私の好きな上方の味付けではあります。

ただ江戸の「ゆき」は、極まった何か为核心にある。上方のそれよりも切実な緊迫感がある。

これは、逆に上方ではストリートすぎて難しいのではありませんか？

それぞれに違った情感はありますが、なるほど、俺の「思い」のニュアンスの違いを感じました。西が綿雪なら、東は粉雪の感じだったかもしれません。

川崎 隆章

# 伊予節も

## 唄い習へり春の雨

### 露月

#### 西松布詠

花の嵐を思わせる雨の中を羽田から松山へ飛び立ったのは四月四日の早朝だった。

昨年の秋に続いて二度目の松山は花曇り。堀の内公園の堀端の櫻が紅をさした乙女の類の様まあるく咲いていた。今回は第一回伊予節全国大会の審査員と特別出演の為に招かれた。

伊予節は江戸末期から明治時代にかけて全国で流行し愛媛の代表的な座敷唄として唄い継がれてきたが、戦後の花柳界の衰退と共に風化しつつある。そこでこの名歌を正しく後世に継承すると共に文化の振興、地域の活性化を図ることを目的として三十八名の出場者が美声を競い合った。私は、江戸の伊予節「花は上野」を、その昔今は亡き神楽坂まき子師から習い好きなき唄のひとつとして櫻の季節になると良く唄っていた。

「花は上野か染井のつつじ 今日か飛鳥(明日)と日暮しの、」と江戸の花の名所を巧みに唄い込んだ調子の良い唄であるが、「君に王子の狐穴からいるのは女郎衆を招かれて」の箇所はテンポをゆるめなければならぬのがなんとおもしろい。お弟子さんもこの箇所に来ると何度か「狐穴からアナ、アナ、アナ、アナ、」の苦勞の繰り返しである。

その曲が伊予節の原点だったとは！ この唄は文化十二年(一八一五)に江戸中村座で上演された長唄の一節で弘化三、四年(一八四六、一七)には全国

「泥酔して高いびきで亡くなった最後を看取ったのも父でした」と語り下り「落ちて着いて死ぬような草枯る」の句を土地も人も清らかである、住まひも清らかである一洵氏に贈ったと言う。一山頭火にとつて酒は母親のお乳だったのでしよう」の言葉が心に残った。死ぬ三日前に残した日記にこう書かれていた。

懺悔、感謝、精進、の生活道は平凡ではあるが人の本道であると思う。芸術は誠であり信であるもの最高峰である。感謝の心から生まれた芸術であり何ぞすことは出来ないであろう。感謝があればいつも気分が良い。気分が良ければ私にはいつでもお祭りである。拜む心で生き拜む心で死ぬ。そこに無生の光明と生命の世界が私を待っていてくれるであろう。

お遍路さんの地 松山は山頭火にとつてやすらぎの終の住家だったのだ。と穏やかな陽ざしの差し込む庵で胸が熱くなった。伊予節に唄われている豊かな水の薄く高井の里に自生する水草「ティレギ」を見たり紫井戸に住んだという片目鮒の由来の井戸にも立ち寄る。そして車は軽快に伊予市の内子町へと走った。江戸中期に、蠟燭や糸糸の生産で栄えた町は今でも白壁と土蔵の町並みが残っており上芳我邸の屋敷は蠟の大産生産で巨万の富を得たという面影が残る名家らしい風格のある屋敷だった。そろそろ陽のかけの頃時は、大正五年二月に建てられ農閑期に歌舞伎や文楽、時に当時の人々の心の糧、文化的な拠り所として愛されたという。

その後老朽化し取り壊しに

なるところを町民の熱意により昭和六十年に復元したと言う舞台は松羽目を背景に正面に升席、脇に花道、大向、そして回り舞台やすっぽんもあつて歴史の重みが漂いつつか公演をしてみたいと思わせるに足る劇場であった。あまり熱心に見ていたのであつたのを忘れ「閉館です」の声に現実に戻った時、

## 新人紹介

### 縄岡 好 人

毎年一月に恒例の寝床コンサートで開かれます。主に音響関係に携わる教授やエンジニアが迷惑料を自ら支払って出演する本格的なクラシックコンサート。そこで我が師匠は「三味線は日本のクラシック音楽の原点！」とゲスト出演するのですが今回は我が美紗の会の青山さんが見事な弾き語りを披露しました。

### 池水 美 都

昨年八月の宵資生堂ワイド講座で田中優子先生と「三味線」で田中優子先生との対談を終えた師匠のもとに可愛らしい女性が「私、三味線に興味があるのです」と訪れたとか。その人が池水さん。父親の仕事の関係で二歳から十八歳まで海外に居住したせいかな日本文化にかえて惹かれ東大美術科で日本美術を専攻し昨年四月にリクルート社に入社したという若き才女で御座います。卒業論文は「白隠の観音像」となかなか渋いセンス！

### 森 田 美 智 子

師匠の稽古場の向かい側にある福祉会館に井上流の上方舞の稽古の後ふと立ち寄った森田さん。おどろきの樹でコーヒーを飲みながらのおしゃべりで三味線の稽古場が二階にあると知りすぐに入門なさいました。今は亡きご主人は歌沢芝金のご子息で厳しい稽古をなさっていらつしやうたけれど存命中はついで教えてくれたなかつたとか。暑い日も寒い日も素敵な着物姿で凛としたなかなかの美声を磨いていらつしやいます。「私は音痴だから。」と仰つて三味線の方に力をそそいでいらつしやいます。が次回の会には是非皆さんに上方の味をお聞かせ下さいませ。

### 西 行

な。の気分が美味い料理を味わいほろ酔い気分が風呂上がりの浴衣がけで道後公園の夜桜見物と洒落こむ。灯りの下で透けて微笑む櫻の雲に揺られながらふらふらと松山をこよなく愛した父の顔をなつかしく想った。雲にまごう花の下にて眺むれば朧に月は見ゆるなりけり

事の合間を縫つて稽古に通い先日のお会では最年少のデビューを飾りました。

西行

それを聴いていた大林組音響研究室室長の縄岡さんが触発されて即入門と相成りました。先日のお伊勢参りを暗譜で弾き衝撃のデビュー。仕立て下ろしの着物でピカピカの一年生よろしく見事な構

早速庵尾島生まれの祖母の形見の三味線を直し多忙な仕

き取っている。と田中優子さんが語っている「儂」、是非お聞き下さいませ。美紗の会 五四四七二四二二 ぶどうの樹 五四四七二四二二にて、限定発売中(定価三千円)

## ニユーアルバム

### 好評発売中!

西松布詠の三枚目のCDがようやく完成いたしました。シンクソウル・クレッセント・ムーン・ブルースに続き、今回は端唄・小唄・歌沢の十九曲

が収められています。私は布詠さんの三味線の音から「つかのま」という時間の切なさを、その切なさの中で生きる人間たちの物語を聞

大久保 記